

■ ジョニー・トー (杜琪峯) 『エグザイル/絆』 (2006)

香港のアクション・ノワール作品。マカオを舞台にした作品であり、香港の風景とは随分異なるところも興味を惹かれる。本作はクエンティン・タランティーノ的雰囲気が充満しつつも、ラストの四人組の銃撃シーンは、かの『ワイルドバンチ』を彷彿とさせる堂々たる作品に仕上がっています。久々の胸踊るアクション・ヴァイオレンス巨編と言える作品です。

ジョニー・トー (杜琪峯) は、1955年香港に生まれ、香港ノワール作品の名手として、“はずさない人”であり、これもまた香港映画界を代表するチャウ・シンチー (周星馳) の主演作品を手掛けた経歴も持ちます。タランティーノ作品のジェネリック版などと陰口を叩かれることもあるようですが、十分なオリジナリティを感じる事が出来ますし、功夫 (カンフー) を銃に置き換えた殺陣とも言うべき一つの型をリアルに表現することに成功した手腕を持っています。巨悪を相手に五人の人的繋がりが基本的なテーマになりますが、これは『昭和残侠伝』における花田秀次郎と風間重吉のレベルにまで昇華されていますし、生き残ろうとさえ考えない潔さは、『ワイルドバンチ』のウィリアム・ホールデン、アーネスト・ボーグナイン、ウォレン・オーツ、ベン・ジョンソンの姿を踏襲します。これこそ破滅の美学であり、俠気の体現化でもあります。主演は、アンソニー・ウォン (黄秋生) フランシス・ン (吳鎮宇) ラム・シュー (林雪) ロイ・チェン (張耀揚)、そして敵役のサイモン・ヤム (任達華) ラム・カートン (林家棟) それに赤ん坊を抱いたまま銃をぶっ放すフランシス・ンの妻を演じたジョシー・ホー (何超儀) の勇姿は強く印象に残ります。

■ 吉田大八『敵』 (2025)

以前同名の筒井康隆の小説に触れたことがありましたが、今回は吉田大八 (1963~ ) が脚色し監督した作品についてですが、「主観的な現実の”歪み”を描いた作品」という評を目にし、まさに納得できる表現だと思います。主観的な現実と客観的な現実の境目の曖昧さは、決して”老い”だけが原因ではないけれど、“老い”てくると増してくるのは事実だと思うのです。現代社会での自己認識の成否の確認の難しさは、情報量の過多が原因で大きくなっているのであり、これは脅威でもあります。また、本作では筒井康隆作品の特徴でもある”不条理”と”現実の不確かさ”が加わり、さらに脅威が増してくるのです。となれば、人間にはディフェンス・メカニズムが発動します。本作の中で主人公が首を吊ろうとするところは、まさにその表れです。人間は外部からの異質なものに対して自分自身を守らんがために積極的な抵抗を見せるもので、その形態は経営組織論の中で数十種類も挙げられています。自身を守るため死を選ぶケースも含まれるのです。そういった意味では、本作は経営組織論の意味合いを持った社会科学的作品であり、シチュエーション・コメディの要素を持ったオフビートなコメディとも言えます。いずれにせよ、老いも若きも脅威を感じながら生きていかななくてはならないのは大変な苦痛です。平穏で、知的水準が高く、また余裕のある生活を送る本作の主人公にしてこういう状況に陥るのですから、老後の不安を抱えた者にとっては益々脅威は募ります。これは、『プラン75』の入口的作品であるとも言えなくもありません。

本作についての、吉田大八の発言の中で「日本家屋を取るテーマがあったのでモノクロへの必然性を感じた」といった趣旨のものがありましたが、これは効果的で成功しているのではないのでしょうか。カメラを担当した四宮秀俊 (1978~ ) は、これまで真理子哲也、濱口竜介、塚原あゆ子らの作品も手掛けてきた極めて優秀なカメラマンであり、本作でもモノクロの魅力を遺憾なく発揮しています。2025年の前半に公開された新作の中でも極めて意義深い作品として高く評価されてよい作品でしょう。